

長崎浩齋と新発見の「蘭東事始」について

津 田 進 三

杉田玄白の「蘭学事始」は玄白が晩年になって蘭学創始の頃を回想して綴った感動的な名著であるが、明治二年福沢諭吉らの尽力によって刊行せられる迄は写本でのみ伝えられ、しかもその古写本は現在までに僅か一〇種が知られているにすぎない。このたび大槻玄沢に蘭学を学んだ長崎浩齋の手沢本の「蘭東事始」が、御子孫の富山県高岡市の長崎圭爾氏宅にて発見せられたので、ご報告申したいと思う。

一、「蘭学事始」の古写本

「蘭学事始」の古写本は、現在のところこの長崎浩齋手沢本（以下「長崎本」と仮称する）を含めると一一種が知られている。即ち、

(A) 「蘭東事始」と題するもの八種

- (1) 村岡本（天理図書館蔵）
- (2) 佐藤本（佐倉順天堂旧蔵、現在不明）
- (3) 小石本（小石秀夫氏蔵）

- (4) 平戸本 (松浦史料博物館蔵)
 - (5) 矢野本 (矢野宗幹氏旧蔵、現在不明)
 - (6) 金沢本 (金沢市立図書館蔵)
 - (7) 蓬左文庫本 (蓬左文庫蔵)
 - (8) 長崎本 (長崎圭爾氏蔵)
 - (B) 「和蘭事始」と題するもの三種
 - (9) 内山本 (内山孝一氏蔵)
 - (10) 幸田本 (慶応義塾大学図書館蔵)
 - (11) 福沢本 (慶応義塾史編纂所蔵)
- 以上の二種であつて、「蘭学事始」と題するものは⁽¹⁾また発見されていない。

二、「蘭東事始」長崎本の概要

この古写本の大きさは縦二五・三センチ、横一八・四センチで、濃藍色無地の表紙をつけた袋綴の一冊本である。

- (1) 題簽は「蘭東事始 全」とあり、更に蘭の字の下右に「学」の字を、また東の字の下右に「漸」の字を夫々小文字で補い、「蘭学東漸事始」と読ましめんとしている。

- (2) 表紙裏の見返しに次の如き墨書の記載がある。

原名蘭学事始 磐水先生去学字加東字曰蘭東事始之言 蘭学東漸事始也 健窃按須以六字為名略称(否) 則不可解矣

弘化四年丁未四月廿七日 長崎剛健謹識

(原文は蘭東事始の四字を棒線にて抹消し、つづく之言の二字を○○印を附して移動を指示、更に「否則」のところではじめ「略称」

と記してこれを抹消し「否」と訂正してある)

この記載は誠に注目すべき内容のもので、金沢本⁽²⁾にも全く同様の書き入れがあり、既に緒方富雄博士の御研究がなされている。これらについては次章にて考察したいと思う。

(3) 長崎本には大槻玄沢の序文は附されていない。即ち村岡本、佐藤本及び蓬左文庫本とは別の写本系列であることがわかる。

原名蘭學史始 磐水先生去學字
加東字曰蘭東事始之言蘭學東
漸史始也 健室梅須以六字為名
略稱則不可解矣
弘化四年己未四月廿七日 長崎剛健謹識

(4) 開卷最初は「蘭東事始 上之卷」とあり、題簽の史始とは一致しない。また「活潑堂」という蔵書印が押されている。これは下之巻のはじめにも押されている。

また上、下之巻ともにその直前の一枚の遊び紙に夫々「上」、「下」と左下方に墨書せられており、もと上下二冊であったものを合綴したものと推定される。

(5) 本文は墨付六〇葉(上之巻三二葉、下之巻二九葉)で、無野紙に半葉に九行ずつ記されている。

(6) 本文の内容は小石本、金沢本などと異同はないようであるが、ところどころに朱筆をもって「……藩邸におほせし時」の「ほ」を「は」と誤字を訂正したり、「今の桂川君……」の右傍に「国宝」と追記したり、などの書き入れがみられる。

(7) 欄外には墨書の頭注が五項目と、朱書の頭注一八項目とがみられる。その大部分は金沢本、小石本と一致するが、二三異なるものもある。

一、墨書書き入れ

① 順風耳（呼遠筒）のところの上欄）（以下同じ）（尚この個所のみ「X」印をもって上下照応せしめている。）

② 蛮語箋附録万国地名箋亜細亜部作錫蘭又齊狼（印度の地方則意蘭……）

③ 茂質按 山脇東洋観臆セシハ宝曆四年甲戌閏二月七日ナリ 文化十二年乙亥マテ六十二年ナリ

臆志曰 宝曆甲戌年閏二月七日 有行刑於西郊処斬者五人 京兆尹若狭侯酒公侍医原松庵 藤友信 杉玄適者吾党也

請屍於官於獄中解之 使余就観焉

コノ年ヨリ八十八箇年目ニシテ東武ニ於テ同藩ノ人其实ニ徴スル書ヲ得テ 解剖ノ真術ヲ得シモ奇遇トイフヘシ

本邦ニ於テ山東洋始テ観臆セント世ニ知レトモ 本書ヲ見レハ右ノ如ニシテ 斯拳前後若狭藩ノ医師ニシテ解剖ノ嚆矢

ヲセシハ 期セストイヘトモ不可思議ノ事也（京師の山脇東洋先生……）

④ 乙亥七月卒（桐山正哲……）（桐山の二字と乙亥の二字に夫々。。を附しあり）

⑤ 質按ニ 其志ヲ興ス漫遊雜記ニ根基ス 末条ニ附記ス（小石元俊……）

二、朱書書き入れ

① 奠陰逸史氏同関子ノ逸史卷九之六十八頁上紅毛夷至界府始通互市也トアリ（其前後より阿蘭陀船は御免ありて……）

- ② 文廟ハ即チ第六代文昭院殿家宣卿也（「文廟来た藩邸におはせし時……」）
- ③ 魯西亜漂流民記御覽ノ条 寛政五年癸丑九月十八日吹上ノ御物見ニ於テ幸太夫問答ノトキ 日本人ニテハ桂川甫周様
中川淳庵様ト申御方ノ名ヲハ何レモ存居申候 日本ノ事ヲ書候書物ノ中ニモ書ノセ有之ヤウニ承リ存候 此時御前ニ即
テ甫周君ト多紀永寿院侍坐セリ（「桂川家ノ御事は……」）
- ④ 月池君弟中良 称森島氏 下ノ三ウ可併見（「森島氏なりしが……」）
- ⑤ 有徳院殿ハ第八世吉宗公也（「有徳廟ノ御時……」）
- ⑥ 中津侯ハ奥平大膳大夫也 十万石（「豊前中津侯の……」）
- ⑦ 良沢外孫小島尚質曰 良沢名熹字子悦 其子良庵 名達字子通
良沢号蘭化 中津侯所賜 享和三年癸亥十月十七日歿 年八十一 法名楽山堂蘭化天風居士（「前野良沢といへるもの……」）
- ⑧ 一節切 在南畝莠言下二十五ウ裏（「一重切を稽古して……」）
- ⑨ 相良ハ遠州也 田沼ノ事ナルベシ（「故ノ相良侯……」）
- ⑩ 魯西亜漂流民記ニ云ウ事 桂川氏ノ層上ニ記ス（「中川淳庵は……」）
- ⑪ 玄隨 号槐園（「宇田川玄隨……」）
- ⑫ 元俊 名道号大愚 男竜号園称禮元瑞（「小石元俊といへる……」）
- ⑬ 常陸新治郡土浦 土屋相模守 九万五千石（「土浦侯」）
- ⑭ 市川小左エ門 号寛斎（「市川小左衛門」）
- ⑮ 海上郡ハ上総 下総トモニアリ（「近国海上郡……」）
- ⑯ 解剖図賦序事 可併見（「随鷗と改め……」）
- ⑰ 志築 名忠雄 著曆象新書 又訳検夫爾之鎖国論（「志築忠次郎と……」）

⑬ 号穀里（佐十郎と改名し……）（尚、佐十郎の右傍に「貞由」と書き添えている）

右のうち、金沢本では墨書の②と朱書の⑬の後半と⑭とがなく、小石本では更に朱書の①もみられない。金沢本では朱書の①は

① 浩齋老人云 奠陰逸史氏同関子ノ逸史卷九之六十八頁上 紅毛夷至三界府ニ始通ニ五市也トアリ 以下朱字細書皆係浩齋老人之説

となっており、朱筆の書き入れはすべて長崎浩齋によるものであることを明記している。小石本では何故かこの朱書の①がなく、別に

② 是 余か父の大愚先生 斯人を見出して天文学問五郎ニ薦め 其老親を養ふの費と遊学の資を兩人より出して 蘭学を大槻先生に学はしめたるなり 小石竜識

という朱書が、橋本宗吉のところに記されている、などの違いがある。

⑧ 卷之上のあとに長崎浩齋による次の如き杉田玄白の小伝が朱記せられている。

九幸老人小伝

杉田玄白先生。諱翼字子鳳号鷗齋。又号天真楼。世々為若州小浜侍医。住三東都。入賜謁医員。中年無嗣子。養奥州建部清庵二男以爲嗣。其人名勤字白元号紫石。而後生一子一名豫字立卿号錦腸。以爲二男。讓家祿於白元。而伴立卿。隱居于浜街。慕六六山人之風。自号小詩仙堂。文化十四年丁丑四月十七日卒。享年八十有五。立卿受箕裘。統鳴于一時。故今有杉田氏兩家也。此年健東遊。四月九日至三東都。

文政三年庚辰仲冬 浩齋長崎健謹識

（尚、橋姓を消して長崎と改めてあり、又浜街の上欄外に「山伏井戸」と注記している）

これは小石本、金沢本にもみられるもので、後述の通り浩齋は本写本を文政三年九月に入手しているので、入手後まもなくこの小伝を書いており、玄白への尊敬の念がうかがわれると思う。

(9) 引きづついで今度は大槻玄沢に関する私淑のあらわれと思われる資料の写しが添えられている。即ち

高橋作左衛門江

松平政千代家来

大槻玄沢

右其方手ニ附阿蘭陀書籍和解之御用

相勤候様申渡候間得其意家業之

透に御役宅へ為相詰馬場佐十郎手伝

為仕可被申候尤渋江長伯方江も折々罷

越候様可被申渡候

ツケ札文化八年辛未五月十五日撰津守殿御同朋頭平井仙阿弥を以御渡

とあり、更に又「天保十五年甲辰五月十五日高峯氏ヨリ示サル玄幹、茂楨ノ書ヲ写ス」として「北米利幹合衆国小誌尾卷之末」の一文が写されている。そしてこれに「……右ハ今の参政堀田侯より先考生前に賜ハリし賛詞也……」という「茂楨敬記」と、「……亡兄刻以附此編……」という「清崇謹識」の二文が附されている。

(10) 下之卷のあとには墨書にて永富独嘯庵の漫遊雜記から次の二章が摘記されており、更にこれに朱筆をもつて返点、送仮名及び頭注などが附されている。「尚、右傍に書き入れがあり文中（ ）にて示した。」

(頭注) 雜記四十二葉「原書無之、字、以ニ小朱圈ヲ紀ス之。」

和蘭(紅夷)之俗。善ニ(能)汗吐下ヲ。宝曆壬午、春(余)西遊シテ到リ長崎ニ。就テ訳師吉雄氏ニ。得聞彼医法(通ス彼邦之語)。

雖_レ其_レ治術峻劇（剛復）織功。難_レ遵_レ用_ニ於_{（此）}邦人_一。然而（至_ニ）干汗吐下之機用_一。則一一与_ニ我古医道_{（方）}符_ス矣。夫_レ中華聖人之邦。失_ニ其道_ニ二千年。特於_ニ蛮貊_一。得_レ之者、不_ニ亦異_ニ乎。且其国政、不_レ禁_レ解_{（割）}人屍_一。其民亦不_レ屑_ニ屠腸絶筋之慘_一。是以_テ人病_テ死_シ。病源不_レ明_レ則、剝_レ視_{（之）}視_{（之）}視_{（之）}。以_テ為_ニ後圖_{（者）}（如_レ此）數千年。早_レ此其書鬱然_{（而）}存_マ焉。有志之士、考証玩索_{（可）}（有_レ）以_テ獎_ニ助志業_{（者）}也。

（頭注）雜記十五葉

乳岩不_レ治、自_レ古然_{（而）}。而_{（和蘭）}（紅毛）書中有_レ言曰、其初發如_ニ梅核_{（之）}之時。以_テ快刀_{（割）}之。後從_ニ金瘡之法_一。治_レ之、斯_レ言有味、雖_ニ余未_{（試）}之。書_{（以）}告_{（後）}人_{（待）}後世_{（）}。紀州花岡隨賢近時割岩之術此説ヲ讀_テ發明_シ獨得_ノ為_ス所トキケリ右独庵庵漫（遊）雜記 按宝曆壬午ハ十二年ナリ 文化十二年乙亥マテ五十四年トナル 有志之士考証玩索セハ有可_レ奨助志業者ナリトイヘレハ所見アリト知ラル 今ノ蘭学暗ニコ、ニ根基スルカ如シ

この摘録は金沢本、小石本のほか村岡本、蓬左文庫本にもみられるが、村岡本と蓬左文庫とは「茂質補記」と明記されており、朱筆の返点、送仮名はなく、明らかに別系統の写本と思われる。

(11) 本写本には次の如き実に注目すべき奥書がある。

磐水先生使塾生写之以

見寄贈健

維昔文政三年庚辰九月

この記載から次のことが判明すると思う。

- ① 長崎本は大槻玄沢が大槻家蔵のものを、
- ② 直接塾生に命じて写させたものであって、
- ③ しかも蘭学事始が完成した文化十二年から僅か五年後の文政三年という早い時期の写本である。

② 従つて大槻家蔵の蘭学事始は「蘭東事始」と題されており、またこの時点では序文は附けられていなかった、と思われる訳である。

このため「原名蘭学事始」と信じる浩齋は同年十二月玄沢に書簡をおくり、題名への疑問をただしたのである。

三、「蘭東事始」という題名について

長崎浩齋は外科をもつて加越能三州に聞えた長崎家の五代目で、寛政十一年（一七九九）九月七日越中高岡に生れた。名を健又は剛健、字を愿禎又は玄貞、号は康齋のち浩齋といい、清風明月楼主人、鶴郊居士などと称した。

文化十年杉田、大槻、宇田川などに学んだ高峯幸庵から蘭学をうけ、文化十四年（一八一七）四月九日杉田玄白に師事するため江戸に着いたが、四月十七日に玄白が死去したので、五月二十八日大槻玄沢と杉田立卿とに入門した。

文政三年（一八一〇）五月杉田玄白三年忌に再び江戸へ出て、玄白の隠居所であつた晴曠楼の宴にも出席している。川島恂一氏⁽⁹⁾の御好意による牧田水石筆「晴曠楼宴遊図」には親友の河口祐卿らと共に浩齋も描かれている。そして恐らくこの時に浩齋は「蘭学事始」をみるか聞くかした機会があり、すぐ大槻玄沢にその写本を依頼したので、早くも同年九月に入手し得たものと思われる。確実な資料を切望する次第である。

さて「蘭東事始」の題名に不審をいだいた浩齋の質問に対する玄沢の返書を発見され、発表されたのは林敦子氏である。長崎家とは親戚の林氏（筆名木々康子）は、その小説「蒼龍の系譜」⁽¹⁰⁾のあとがきの中で、文政四年一月十一日付の玄沢から浩齋へ宛てた書簡を紹介せられている。林氏の御厚意によりみることが出来たその長文の書簡の一節には

蘭学事始外題ニ蘭東と認置候御疑問御尤千万奉存候 何れも拙老命候題目にて御座候蘭已^x東と申意にて蘭東なと、共 致試候事にて御座候 覚へ易き蘭学之方可然やと存候事にて候と記されている。

これにより「蘭学事始」の題名も「蘭東事始」も両方とも大槻玄沢の命名であることが判明したわけであるが、「蘭学事始外題ニ蘭東と認置候」という一節からは「外題」とは「広辞苑」⁽¹¹⁾によれば①書物の表紙に記する書名②転じて書物の標題、とあるので、「蘭学事始」というものがあつて、その標題に「蘭東」とつけた、という風にとれるようである。

更にまた「蘭」^ニ「東」^ニと申意にて「蘭東」と命名したとの解説は、村岡本、佐藤本、蓬左文庫本にみられる大槻玄沢の序文の「是実に蘭」^ニ「東」^ニせりとやいふべき起原、悉く本編の次第也」と全く符合し、「姑く『蘭東事始』と題して即函丈に進呈す」という一節と密接にかかわっているようである。即ち浩斎の質問が大槻玄沢に序文を附ける必要性を感じさせた、と考えることも出来そうである。

長崎浩斎は詩文を大窪詩仏に、書を市河米庵に学んだが、蒐書蔵書頗る多く、黒本稼堂「三州遺事」⁽¹²⁾には「コノ人ニシテ今ノ世ニ在ラシメハ、イカハカリ世ノ考証家ニ裨補スルカ知ルヘカラス」と記されている。その著書には「浩斎医話」、「蘭学解嘲」などが知られているが、「近代著述目録後篇」⁽¹³⁾には「家蔵千文蒙求書目」「半千文」「医学物語」「百医蒙求」「和魂漢才」「籤舎随筆」「医経千字文」などもあげられている。

長崎浩斎は元治元年（一八六四）九月十四日死去し、高岡市瑞竜寺に葬られている。

四、ま と め

長崎浩斎手沢本の「蘭東事始」は「蘭学事始」の古写本の十一冊目の発見であり、文政三年という早い時期に、大槻玄沢から直接与えられた点で注目すべきものと思われる。

稿をおわるに当り種々御高配を賜わった長崎圭爾氏、林敦子氏、種々御教示を頂いた片桐一男氏、川島恂一氏、末中哲夫氏に対し厚く御礼を申し上げます。

文 献

- (1) 緒方富雄 蘭学事始をめぐる未解決の疑問 学校教育研究所年報一〇号 昭和四一年
- (2) 津田進三 金沢にて発見の「蘭東事始」に就いて 蘭学資料研究会研究報告一九三号 昭和四二年
- (3) 緒方富雄 「蘭東事始」と「蘭学事始」の命名者 大槻玄沢 蘭学資料研究会研究報告三二〇号 昭和五一年
- (4) 松村 明 蘭東事始 日本古典文学大系九五卷 岩波書店 昭和三九年
- (5) 高岡市役所 高岡市史 中卷 昭和三八年
- (6) 高岡市役所 高岡史料 下卷 明治四二年
- (7) 板沢武雄 日蘭文化交渉史の研究 吉川弘文館 昭和六一年
- (8) 片桐一男 河口家と杉田玄白 蘭学資料研究会研究報告一六五号 昭和三九年
- (9) 川島恂一 河口家と阿蘭陀流外科 蘭学資料研究会研究報告二一一号 昭和四三年
- (10) 木々康子 蒼龍の系譜 筑摩書房 昭和五一年
- (11) 新村 出 広辞苑 第二版 岩波書店 昭和四五年
- (12) 黒本稼堂 三州遺事 石川県立図書館 昭和六年
- (13) 近代著述目録後篇 近世著述目録集成 勉誠社 昭和五三年
- (14) 末中哲夫 「蘭東事始」新写本について 蘭学資料研究会研究報告三二四号 昭和五二年

(静岡市幸町二七一—二一五〇二)

A Newly Found Copy of the “Ranto Kotohajime” and Kosai Nagasaki

by

Shinzo TSUDA

Japanese modern medicine began with the introduction of Dutch medicine in the Edo era. On this subject, “Rangaku Kotohajime”, written by Gempaku Sugita in 1815, is a very important memoir.

To our regret, we have not found his original book yet, and we have only 10 copies of this book even now.

The author recently discovered a copy of this book named “Ranto Kotohajime”. This copy was copied by Gentaku Otsuki and presented to Kosai Nagasaki in 1820.

Kosai Nagasaki (1799~1864) studied Dutch medicine under Gentaku Otsuki in Edo in 1817.

This copy has several helpful notes by Koseki Nagasaki. He was convinced that the original title of this book had been “Rangaku Kotohajime” and so on the inside of the cover of this copy he had raised the question of this title.

This newly found copy should contribute to the study of medical history in Japan.